

フォーラム：経済学史は経済政策研究の役に立つのか

田中秀臣（上武大学ビジネス情報学部）

中村宗悦（大東文化大学経済学部）

趣旨説明

本フォーラムでは、今日の日本における経済論戦の混迷ともいえる状況を背景にして、「経済学史は経済政策研究の役に立つのか」という問題を提起する。本フォーラムの報告者は、各々その専門研究分野を経済学史（ないしは経済思想史）に置いている。そして経済学史研究はまた歴史研究であり、現実の問題の解明や考察に寄与することには、一般的には疎遠のようなイメージがあるだろう。しかし、日本の経済学史の歴史を紐解けば、その先駆者ともいえる河上肇（1879 - 1946）や福田徳三（1874 - 1930）らは、過去の遺物の発掘としてではなく、その当時の社会・経済問題を論ずる有効な手段として経済学史研究を利用した。また日本の経済学史研究者に大きな影響を与えた杉本栄一（1901 - 1952）は、その著作『近代経済学の解明』（1950）で、経済学史の実践的性格の意義を強調したことで知られている。

このような経済学史の実践的性格は、実は経済学そのものの特徴によって規定されているともいえる。実験経済学の隆盛はあるものの、制御可能な実験によって経済学の命題を実証することには限界がある。そのため類似した経済環境をとまなう過去の事象との比較が、単なる比喩以上に重みをもってくるといえよう。これは経済史的な現象だけではなく、経済学者や経済政策の担当者の保持している経済思想（野口旭氏の報告にある「既得観念」と表現できる）にも妥当することである。

本フォーラムで明らかにされるが、過去の経済学者や政策担当者が有している既得観念のあるパターンが、政策論争のたびにあたかも通奏低音のように繰り返し生起することは注目に値するだろう。これは単純な進歩史観では十分に把握できない現象ともいえる。われわれは、この現象を、19世紀の日本の金本位制論争、大恐慌期、戦時期経済、戦後の経済発展と停滞、などのエピソードの中で具体的に検証していくだろう。

その一方で、われわれの経済学史研究のそれぞれの基礎となっているいくつかの経済思想の立場、例えば新古典派経済学、ケインズ経済学、マルクス経済学などが抱える現代的な意義や問題点も、この経済学史研究の政策論議への貢献という視角から、あらためて問い直されるに違いない。

本フォーラムにおけるわれわれの意図は、経済学史研究者がそのもてる専門性と現実的な関心から、従来の政策論争の質を高め、さらに政策に役立つ実践的な技術（教訓）を見出すことにある。これは先に触れたように日本の経済学史研究が、長く維持していた伝統の再発見でもある。フォーラムへの多くの方のご参集をお願いしたい。